

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：37109

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22500599

研究課題名（和文） 学校体育・スポーツがスポーツ観形成およびスポーツ価値意識に及ぼす影響

研究課題名（英文） Effect on PE Class and Sport in regard to the sense of Sport Value and View of Sport

研究代表者

中島 憲子（NAKASHIMA NORIKO）

中村学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：00301721

研究成果の概要（和文）：

スポーツに対する価値意識は、「社会的有用性」「日常的有用性」「陶冶性」の3つの因子（各因子5項目、全15項目）で構成された。スポーツ像については、①フェアプレイ、②規範意識、③協力・共同、④自己志向、⑤科学・合理主義、⑥環境、⑦努力志向、⑧レク志向、⑨勝利志向、⑩技術・戦略、⑪鍛錬・精神主義、⑫伝統、⑬ジェンダー・フリー、の13カテゴリー、各3項目、全39項目の調査票が完成された。そして、このスポーツに対する価値意識、およびスポーツ像を、個々のもつスポーツ観として定義することとした。

研究成果の概要（英文）：

The value attitude over a sport consists of three factors (with five separate items within each factor, making a total of 15 items altogether): The 3 factors are as follows: 1) Social Usefulness, 2) Everyday Usefulness, and 3) Educability. Concerning the sport's image, a questionnaire was completed consisting of 13 categories, which were in turn separated into three items within each category, making a total of 39 items within the questionnaire. The 13 categories are as follows:- 1) Fair play, 2) Normative consciousness, 3) Cooperation, 4) Self-oriented, 5) Scientism or rationalism, 6) Environment, 7) Effort oriented, 8) Recreation oriented, 9) Triumph oriented, 10) Skill and Strategy, 11) Discipline and Mentalism, 12) Tradition, 13) Gender Free.

We decided to define the value attitude of each sport, or in other words the sport's image based on the results.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：スポーツ観、スポーツ価値意識、スポーツ・リテラシー、学校体育、運動部活動

1. 研究開始当初の背景

今日において、「スポーツ・リテラシー」は、人々が人間らしく豊かな生活を享受する上において文化的教養の一つとして欠くことのできないものとなっている。それほど、近年のスポーツにみられる大衆化・高度化の進展は注目に値する成果であるが、急速な進展において、スポーツをめぐる外的な側面の立ち遅れや、もう一方、内的側面としてスポーツに関与する人々の態度や価値意識あるいは行動様式に関わる内実が、スポーツのもつ本来の理想とすべき状態であるかは疑問視されている。つまり、急激な発展や高速化された情報社会において、市民レベルのスポーツ文化活動は、①「する」スポーツ中心から、「する」-「観る」-「視る」-「読む」-「話す」-「支える」スポーツへと参加態様の多様化、②学校・職場から地域・クラブへ（スポーツ活動の場）、③青少年・勤労世代中心から女性および中・高年者への参加者層の広がり、へと変化してきたためである。しかしながら、人々のスポーツ文化活動が多様化する中で、学校体育をはじめとして、スポーツ教育システムはそれらへどのように対応してきたのであろうか。

この問いに対して、海野ら（2006）は、スポーツ・リテラシー概念を、「市民としてスポーツを楽しむ上に必要な力」言い換えれば「スポーツにアクセス（する-観る-視る-読む-話す-支える）し、分析・鑑賞・評価しながら、多様な形態でスポーツ・コミュニケーションを創り出す力」と仮定義している。加えて、このようなスポーツ・リテラシーを構成する内容として、①スポーツに関する知識・概念、技能、②スポーツに関する知識・概念、技能を獲得する方法、または獲得した知識・概念、技能を現実のスポーツ分析・鑑

賞・評価に適応するスキル、③スポーツに対する価値意識・態度、の3つの力が最低限として想定されることを示している。つまり、スポーツはいまや実生活に深く根を下ろした文化活動であり、スポーツに関する文化的教養（最低限の①②③）は、その時々必要と要求に即して内容を更新し、生涯にわたって学び続けながら獲得し、形成していくものであるとしている。

ところが近年の研究をレビューすると、将来のスポーツ文化の担い手たる児童・生徒のスポーツ価値意識や運動有能感には明らかに男女に有意な差異が認められ、加えて、スポーツへの愛好的態度や学校体育に対する有用さの認知度でも、女子は男子より有意に低い得点を示していた（海野ら 2006）。しかもこの傾向は、日本ばかりでなく、韓国（中島ら 2008）および台湾（鐘ヶ江ら 2008）においても同様に認められ、さらに、H. Dismore ら（2006）がイギリスの中・高校生を対象に実施した調査によっても、体育への愛好的態度や有能感、体育観などで有意な男女差が認められていた。

つまり、少なくとも児童・生徒のスポーツ観やスポーツの価値意識は、学校体育やスポーツ文化活動が何らかの影響を及ぼし、知識や技能、概念だけではなく、そういった「観」を創りあげていると考えられる。実際に、海野らのオリンピック教育実践研究（吉中ら 2009）では、実際にカリキュラムの中にオリンピック教育の内容を取り込み、中学生のスポーツ観の形成に寄与する可能性を示唆している。また、中島ら（2009）の報告では、スポーツに対するイメージへの影響力は、少なくともスポーツ少年団や運動部活動など、組織的集団経験のない子どもたちにとっては、体育授業はそれらを創る情報源となって

いることも明らかであった。

2. 研究の目的

本研究では、近年のスポーツ文化活動が多様化される中、各個人が抱くスポーツ観やスポーツに対する価値意識が、どういった活動をもとに影響を及ぼし形成されていくのかを明らかにする。特に児童・生徒は体育授業に限らず、運動部活動、スポーツ系のおけいこ事、またはメディアからの情報など、個人的なスポーツ経験というものが、スポーツ観や価値意識を形成していくことは明白である。そこで、本研究では、「スポーツ観」尺度を作成し、客観的に、児童・生徒のスポーツに対する価値意識や、スポーツに対する考え方やとらえ方としてのスポーツ像を測定する。加えて、日常生活や学校の体育授業との関係を分析するために、「学びの履歴測定バッテリー」調査を用いて内実を実態把握し、スポーツ生活やスポーツ教育とスポーツ観との相互関連を分析する。さらにそのことを通じて、スポーツ・リテラシー教育としての基盤となる体育・スポーツの価値性、有用性を高める教育の在り方についての基礎的資料を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 「スポーツ観」尺度の作成と実態調査

まずは、大学生を対象に「スポーツ観」の尺度開発のための第一次調査を実施した。福岡県A大学など3大学の大学1年生を対象に「スポーツに対する意識調査」を行った。回収された656名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた479名を分析対象（有効回答率73.0%）とし、「スポーツにおける社会的有用性（以下、社会的有用性）」「スポーツにおける陶冶性（以下、陶冶性）」「スポーツにおける日常的有用性（以下、日常的有用性）」の3因子からなる「スポーツ価値意識尺度」を作成した。なお、各因子の信頼性係数の範囲は、コンマ72からコンマ81であり、高い内的整合性を有していた。また、「スポーツ

像」の分析カテゴリーとして「勝利志向」「鍛錬・精神主義」「伝統」「努力志向」「自己志向」「ジェンダー」「レク志向」「協力・共同」「規範意識」「科学主義」「環境」「技術・戦術」の12カテゴリーを抽出した。

(2) 体育授業における「学びの履歴測定バッテリー」の作成と実態調査

日本の小学校、中学校、高校における体育授業の中で児童生徒がどのような学びの経験をしているか、その学びの経験内容と学習成果との関連を明らかにするために、体育授業における「学びの履歴測定バッテリー」を開発した。

2007～2010年にかけて中学1年生789名、高校1年生1441名、大学1年生2556名を対象とし、直前の学校階梯での体育授業を回想しながら、そこでの経験内容と意識を回答する質問紙調査を実施した。回収された5915名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた4786名を分析対象とした（有効回答率80.9%）。その結果、「学習成果」次元（「実践的知識の理解（5項目）」「楽しさ感得（5項目）」「共同・共感（5項目）」「運動有能感（3項目）」の4因子18項目）、「学習への構え」次元（「教え合い（5項目）」「規律遵守（5項目）」「自覚的学習（3項目）」「献身（2項目）」「積極的学習（2項目）」の5因子17項目）、「教師の指導性」次元（「肯定的相互作用（6項目）」「学び方指導（4項目）」「学習規律（4項目）」「共感的雰囲気（2項目）」「緊張感（2項目）」「認知的指導（2項目）」の6因子20項目）の3次元で構成される「学びの履歴測定バッテリー」を作成した。

(3) 他国での調査実施に向けた準備と翻訳について

日本における分析結果に基づいて、「スポーツ観」尺度は韓国語への翻訳作業を実施した。また「学びの履歴測定バッテリー」は韓国語、英語、台湾語、中国語への翻訳作業を実施し、現地の連携研究者とともに、論理的妥当性の

検討を実施した。

4. 研究成果

(1) 大学生におけるスポーツ観の実態

1) スポーツに対する価値意識とスポーツ像の男女比較

まず、スポーツに対する価値意識の各因子において、男女間に有意な差は認められなかった。スポーツ像においては、女子に比して男子が有意に高い得点を示したのは、「勝利志向(***)」、「技術・戦術(***)」、「科学主義(**)」、「伝統(*)」であった。逆に男子に比して女子が有意に高い得点を示したのは、「規範意識(***)」、「努力志向(**)」となっていた。(*** $p < .05$ 、** $p < .01$ 、* $p < .001$)

2) スポーツ価値意識タイプとの関連

「スポーツ観」調査の「スポーツに対する価値意識」因子(社会的有用性、陶冶性、日常的有用性)を用いてクラスター分析を行ったところ、4つのスポーツ価値意識のタイプ

(①文化的価値肯定型、②有用性懷疑型、③陶冶性懷疑型、④文化的価値懷疑型)を析出することができた。この4タイプに所属する男女比を χ^2 乗検定にて比較したところ、有意な差は認められなかった。次にスポーツ価値意識タイプ別にスポーツ像の平均値を比較したところ、①文化的価値肯定型のタイプは、②、③、④よりも高い得点を示したカテゴリーが、「協力・共同」や「努力志向」「鍛錬・精神主義」となっていた。また、①文化的価値肯定型のタイプで、②とは有意な差は認められないが、③や④のタイプに対しては有意に高い値を示したカテゴリーは「規範意識」「環境」「技術・戦術」「伝統」であった。

(2) 勝利志向性タイプとの関連

勝利志向性を測定する尺度として、スポーツ像に関係する勝利志向カテゴリー3項目とレク志向カテゴリー2項目の全5項目からなる勝利志向尺度(得点範囲 5~20)を作成した。

男女間比較をしたところ、勝利志向性は、

女子(12.51)に比して男子(13.76)が有意に高くなっていた($t=5.26^{***}$)。これは、今の大学生において、女子よりも男子に勝利志向性が強いことを示していた。

また、勝利志向性を3群(①勝利志向群・②中間群・③レク志向群)に分け、スポーツ像との関連を分析したところ、①勝利志向群が②中間群・③レク志向群に比して高い得点を示したのは「協力・共同」「科学主義」「技術・戦術」カテゴリーであった。なお「伝統」は①勝利志向群・②中間群よりも③レク志向群が低い得点を示していた。

このことから、スポーツの勝利に対するこだわりは、女子よりも男子に強い傾向を示していることが分かった。またその勝利にこだわりをもつ群に所属する者は、スポーツにおいて、協力することや共同的に行うこと、スポーツを科学的に考えようとする傾向、プレイや戦略に対するこだわりを持つ傾向を示していると考えられた。なお、スポーツに対し、スポーツとはレクリエーションであると捉える者ほど、伝統を重んじない傾向にあると考えられる。

(3) 組織的スポーツ活動経験と「スポーツ価値意識およびスポーツ観」との関連

運動部活動や組織的スポーツ活動経験の有無や在籍年数、および在籍パターンにおける差異は、総じて大学生の「スポーツ価値意識」や「スポーツ像」に対し、強い作用を及ぼしているといった結果は見出せなかった。なお、スポーツ価値意識の「日常的有用性」、スポーツ像の「勝利志向」については、組織的スポーツ活動経験を有する大学生において高い得点を示す傾向がみられた。一方で、活動経験のない大学生は、スポーツ像の「レク志向」得点が高い傾向にあった。

このことは、なんらかの組織的スポーツ活動経験を持っている者のほうが、スポーツの日常的な有用性を感得していると解釈できる。逆に、組織的スポーツ活動経験がない者

は、スポーツをレクリエーションとして楽しむ傾向にあることを示唆している。

(4) 総括

1) スポーツ観尺度における調査結果から

大学生のもつスポーツ価値意識やスポーツ像には、男女間、または勝利志向性によって影響を受けていることが明らかとなった。加えて、それらの影響は組織的スポーツ活動経験の有無や継続（経験）年数によっても、スポーツ価値意識やスポーツに対する考え方・捉え方（スポーツ像）といった志向性に影響を及ぼすことが明らかとなった。

2) 日常生活や学校の体育授業との関係

本研究では、体育授業における学びや体育授業に対する好嫌と、スポーツ価値意識およびスポーツ観との関連性について十分に分析することができなかつたが、鐘ヶ江ら（2011）の研究によれば、体育授業の好嫌と運動部活動所属とは相互に関連をもっていることがわかっている。つまり、体育の授業での学びの結果と、運動部活動への所属に対する志向との間には関連があると考えられることから、スポーツに親しむ機会や活動を行う場としての組織的スポーツ活動の連続性や継続性に対する配慮や仕掛けを学校階梯間、学校・地域間で構築していくことの重要性が示唆された。今後は、経験の有無、在籍年数などの量的な要因にくわえ、大学生の組織的スポーツ活動に関わった質的な側面についても検討を加えることが求められる。

3) スポーツ価値意識とスポーツ像の再構成の検討

本研究によって作成されたスポーツに対する価値意識、およびスポーツ像の尺度の再検討を行った。その理由は、まず各因子と各カテゴリ内の項目数のばらつきを揃えるためであり、もう一点は、スポーツ像に設定したカテゴリの再構成のためである（2012年2月）。

そこで、同サンプリングデータを基に主因

子法、プロマックス回転において因子分析を行い、5項目3因子のスポーツに対する価値意識尺度を作成した。また、スポーツ像については、スポーツ像として考えられるカテゴリを再度、体育教育を職業とする研究者6名において選定・加筆・修正を行い、各カテゴリ3項目を選定した。再検討された各因子、カテゴリは以下のとおりである。

「スポーツ価値意識」は、「スポーツの社会的有用性（ $\alpha = .756$ ）」、「スポーツの日常的有用性（ $\alpha = .795$ ）」、「スポーツの陶冶性（ $\alpha = .722$ ）」の3因子、各5項目、全15項目で構成する尺度を作成できた。また、スポーツ像においては、「フェアプレイ」、「規範意識」、「協力・共同」、「自己志向」、「科学・合理主義」、「環境」、「努力志向」、「レク志向」、「勝利志向」、「技術・戦略」、「鍛錬・精神主義」、「伝統」、「ジェンダー・フリー」の13カテゴリ、各3項目、全39項目であった。

ここで検討されたスポーツ価値意識とスポーツ像の各尺度については、韓国語への翻訳を同時に実施することができた。

(5) 今後の課題

このように学校体育やスポーツの教育基盤について詳細な実態や現状などの情報を収集しながら、日本の子どもたちが青年期における様々な体育授業や習い事、運動部活動や社会におけるスポーツなどの経験をもとに、どのような影響の仕方をしながらスポーツ観は形成されていくのかについてももう一步踏み込んだ議論を進めていきたいと考える。また、体育やスポーツを専攻する大学生と、専攻ではない大学生を対象に見えてくるスポーツ観の比較についても、新しい課題としたい。加えて、日本に限らず東アジア各国・地域における子どもや青年期のスポーツ観についても、すでに調査を実施（2013年3～6月）したところである。こういった新たな課題も加えて分析・考察を進めていくことを今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 中島憲子、「学びの履歴測定バッテリー」を用いた授業改善への可能性、体育科教育、第59巻第1号、査読無、2011年、pp.64-65.
- ② 鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・黒川哲也、現代日本における小学校体育授業の現実；学習成果・学習への構え・教師の指導性タイプとの関連から、日本スポーツ教育学会第30回記念国際大会プロシーディング、査読有、2010年、pp.311-316.
- ③ UNNO YUZO、NAKASHIMA NORIKO、KUROKAWA TETSUYA、KANEGAE JUN-ICHI、Urgent Issue in Condition of Physical education Class in East Asia: Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE、The international Conference for the 30th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education Proceeding、査読有、2010、pp.283-288.
〔学会発表〕(計13件)
- ① TETSUYA KUROKAWA、YUZO UNNO、NORIKO NAKASHIMA、Issues on PE Teacher Education in Secondary School: a survey on leaning career of school children in Japan、The 3rd East Asian International Conference on Teacher Education Research、Dec.6.2012、The Hong Kong Institute of Education.
- ② 中島憲子、カンボジアの子どもたちに学校体育をー第三世界における国際教育協力の経験から学んだことー、九州体育・スポーツ学会第61回大会第三分科会シンポジウム、2012年9月9日、宮崎公立大学
- ③ YUZO UNNO、Urgent Issues in Actual Conditions of Physical Education Class in East Asia: Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE、The 2nd International Conference of Korean Society for Health Education and Promotion、Oct.22.2011、Korean National Sport University
- ④ 中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也・口野隆史、韓国における初等体育授業の現状；子どもへの学びの履歴調査から、日本スポーツ教育学会第31回大会、2011年11月13日、兵庫教育大学。
- ⑤ 海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子・黒川哲也・口野隆史、イギリスにおける初等体育授業の現状；子どもへの学びの履歴調査から、日本スポーツ教育学会第31回大会、2011年11月13日、兵庫教育大学。
- ⑥ 海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子・黒川哲也、体育授業における生徒の学びの履歴を把握する方法の開発、日本体育学会第62

回大会、2011年9月27日、鹿屋体育大学。

- ⑦ 中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也、日本における中等体育授業の実態(1)；学習成果と学習への構えとの関連、日本体育学会第62回大会、2011年9月27日、鹿屋体育大学。
- ⑧ 鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・黒川哲也、日本における中等体育授業の実態(2)；学習への構えと教師の指導性との関連、日本体育学会第62回大会、2011年9月27日、鹿屋体育大学。
- ⑨ 中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一、日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(1)；スポーツ価値意識のタイプとスポーツ像との関連、九州体育・スポーツ学会第60回記念大会、2011年8月27日、名城大学。
- ⑩ 海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一、日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(2)；勝利志向性とスポーツ観との関連、九州体育・スポーツ学会第60回記念大会、2011年8月27日、名城大学。
- ⑪ 鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子、日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(3)；組織的スポーツ活動経験とスポーツ観との関連、九州体育・スポーツ学会第60回記念大会、2011年8月27日、名城大学。
- ⑫ 海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一、大学における体育教師教育の課題(1)；特に指導観の自己形成をめぐる、九州体育・スポーツ学会第59回大会、2010年8月28日、鹿児島女子短期大学
- ⑬ 松崎大輔・海野勇三・中島憲子、中学・高校生のスポーツ観形成の実態；東アジア地域の比較分析を中心に、九州体育・スポーツ学会第59回大会、2010年8月28日、鹿児島女子短期大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 憲子 (NAKASHIMA NORIKO)
中村学園大学・教育学部・准教授
研究者番号：00301721

(2) 研究分担者

海野 勇三 (UNNO YUZO)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：30151955
鐘ヶ江 淳一 (KANEGAE JUN-ICHI)
近畿大学九州短期大学・保育科・教授
研究者番号：90185918
口野 隆史 (KUCHINO TAKASHI)
京都橘大学・文学部・教授
研究者番号：60192027
黒川 哲也 (KUROKAWA TETSUYA)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：50390258